

# 会報

社団法人 日本技術士会  
The Institution of Professional Engineers, Japan  
原子力・放射線部会

<http://www.engineer.or.jp/dept/nucrad/open/>

Great People on Nuclear & Rad.



第5号

2009. 3. 31 発行

編集: 広報幹事

[pwd78n32dy@mx1.ttcn.ne.jp](mailto:pwd78n32dy@mx1.ttcn.ne.jp)



## 巻頭言： 技術士制度に期待する



### ～ 技術士は全球への扉 ～

工学院大学理事長・JABEE  
会長 大橋 秀雄



技術のプロとしての国際通用性を強く意識した技術士法の改訂（2001 施行）、要望が高かった原子力・放射線部門を新設する省令・告示の改正（2004 施行）は、何れも技術士の躍進に大きな契機となりました。これらの審議に携わった技術士審議会／分科会の一員として、ほんとによかったと痛感しています。技術士の総数は10年前の3万人台から今や6万人台へ、原子力・放射線部門はゼロから出発して今年には300人を越えるでしょう。その存在感は、社会の中でも、若者に対しても確実に高まっています。

技術士は、単に高い専門能力の証に留まらず、公益確保に対する責務を負っているところに真価があります。自らの良心に従うのは当然ですが、技術士はそれを公に宣誓した立場にあります。技術士は個人に付随する資格ですが、実は組織が社会的責任 CSR を果たす骨格になります。揺らぎやすい口先だけの CSR から、責務としての CSR に高めるのが、少なくとも技術に関する限り、それは組織の中に点在する技術士の役割です。組織人としての技術士の位置づけが今なお不確実なのは、この役割に対する認識が十分行き渡っていないせいでしょう。

その中で、事業の存続自体が Public Acceptance に

かかっている原子力・放射線部門では、CSR に対する技術士の役割が一段と重いものになります。部門の技術士数が急激に増えているのは、この認識が特に行き渡っている、いや待望され続けてきた現れなのでしょう。

原子力カルネッサンスという心地よい言葉をたびたび耳にします。化石燃料に頼らないエネルギー源が絶対必要だという信念で歯を食いしばってきましたが、脱炭素社会への流れのなかで再生のチャンスが巡ってきました。原子力・放射線部門にとっての Public は、domestic を越えて global・全球的になります。CSR の S も世界を意味します。そこで全球的視野から公益に責務を負うものが必要になります。日本技術士会が2000年から申請を受け付けている地域資格の APEC Engineer、昨年からは申請受付を始めた全球資格の IntPE などは、国境を越えて CSR を担う役割を強く意識すべきでしょう。他国の資格、たとえばアメリカの PE を取得する方も多く出るでしょうが、全球資格もぜひ視野に入れて下さい。技術士が、全球への扉を開きます。



### ～ 技術士に期待すること ～

日本原子力学会副会長  
辻倉 米蔵



現代社会は好むと好まざるとに関わらず、日進月歩

で変化していく科学技術の上に成り立っています。私たちが接している科学技術は、生活の基盤を支えている基礎的なものから最先端の開発途上のものまでが混在しています。それらが社会に対してどのような意味を持っているのかを正確に認識する事が、健全な社会活動を育んでいく上で必要なことです。

このような観点から、技術士には二つ役割を期待したいと思っています。

一つ目の役割は、技術の持つ意味を社会に対して説明し理解を得ていくの活動です。

二つ目は、産業界の中で技術の核となっていただくことです。

一つ目の役割については、特に、原子力の利用において、その必要性が顕在化しています。原子力利用に関する技術については、礎であり維持管理していくべき技術と最先端の開発途上の技術が混在し、また、平和利用と軍事利用とが同世代に存在することが、さらにその理解を困難にしていると思われま

す。非日常的な原子力の利用が社会に根付いていくためには、社会全体の人々が原子力技術を正確に理解することが必要です。

しかしながら、現実には、その内容が複雑かつ専門的すぎることから、一般の方々が自らの知識と情報で理解することは困難と思われま

す。そこで、社会的に認知された技術士の方々が、専門家の立場から、わかりやすく解説することにより、社会の方々の理解を促進できるのではないかと思います。

次に、技術士には二つ目の役割が期待されます。

健全に技術が育ち定着して行くには、常に新技術の開発と規格化、標準化による実用への展開といったプロセスを繰り返し成長していくことが必要です。

原子力の現場では規制への適合が大きく前に出て、一見それが技術的に優先的な活動のように受け止められる嫌いがありますが大きな誤りです。

電力自主保安のプラント管理を達成していくための重要な要素は、事業者や製造者の技術力です。専門的技術能力を備えた技術士が事業者の保安活動に組み込

まれて活動することにより、高度な事業運営が可能となるものと考えられます。そのような専門性を具備することが安全で信頼性の高い運用に必要となってくるのではないのでしょうか。

このような技術士の活躍を大いに期待したいと思います。



## これからが正念場

部会長 林 克己

部会設立からほぼ4年間がたち、33人(会員17、準会員19)でスタートした部会も今では191名(会員145、準会員46)となりました。部会では、原子力・放射線分野において技術士



制度が世の役に立つ仕組みの実現を目指し、「制度活用の具体化推進」「必要な技術士数確保」「活用に応じた継続研鑽」「広報」を柱にして活動してきました。

これまでの制度活用の検討は、現行法制度の中での活用が主でしたが、将来の原子力法制度の検討を進めておられる東大の班目先生の例会講演会をきっかけに、新しい展望が開けてきました。技術士の果たす役割を米国PE並みにすることも検討項目のひとつです。そこで、東大法制研究会に佐川理事に技術士会の立場で出席いただくと共に、新しく「技術士制度活用WG」を部会幹事と各社から推薦された部会員の合計14名で立上げ、1月から検討が始まっています。

技術士数については、平成20年度試験で61名が合格され総計309名となりましたが、当部門の専門分野の広さから考えても制度活用にはとても足りない数といえます。平成21年度にはこれまで以上の受験をいただけるよう所属組織内外に働きかけていただくようお願いいたします。

部会員の皆様のご意見とご協力を今まで以上にお願いする次第です。

## 理事会の状況について

日本技術士会理事 佐川 渉

昨秋からの理事会での審議事項・報告事項の中から、いくつか状況を報告します。

中心となっているのは昨年12月に施行された公益法人制度改革に対応するための、定款の見直し等の検討です。これまでの審議結果は、すでに会員の手許に届けられている3月12日の臨時総会案内の中に中間報告として纏められています。本会の組織・運営に係わる基本的な事項について、見直し・検討が進められていますが、特に大きな変更としては、地域に密着した会員活動の活性化を図っていくため、理事会の決議により支部その他地域組織を設けることが出来るとした案で、県単位等の地域組織が設置可能となります。また、毎年3月に臨時総会を開催しないと翌年度の事業計画や収支予算が決められないという規定を見直し、理事会での決議事項にする案としています。その他、多くの変更案があり、本会HPで会員の意見を聴取後、再検討を行い、6月の定時総会に諮る予定となっています。是非、変更内容を一読の上、ご意見をお願いします。

また、来年度の事業計画と収支予算についての審議を行いました。来年度は、事業計画の柱として昨年の3項目に加え、「国際活動の強化」を掲げ、体制や活動の強化を図ることとしています。また、予算は部会活動等の自由度を拡大する方向としています。

その他、従来認可制であったプロジェクトチームを、「会員による活動グループの登録制度」に改めることや、技術士CPD監査の実施等が審議・決定されました。

なお、柏崎刈羽原子力発電所の第二次調査の計画、報告や、原子力eyeの特集号の紹介、東大法制研究会への委員参加等が報告され、原子力関連の活動が注目されていることを申し添えておきます。



## 柏崎刈羽原子力発電所の第二次復旧調査チームに参加して

広報幹事 伊藤 晴夫

新潟県中越沖地震の発生以来、停止している東京電力の柏崎刈羽原子力発電所がいつ運転再開できるかは我々としても大きな関心事であります。日本技術士会では平成20年4月の第一次調査に引き続き、11月26日に作業が先行している7号機を中心とした第二次現地調査を行い、機器の健全性が確認され、復旧が安全に行われていることをプレスやHP等で公表しました。

今回の調査は、原子力の専門家を自負する原子力・放射線部会（佐川、成川、伊藤の各幹事が参加）が中心となり準備を進め、建設、機械、電気電子の各部会と連携を図りながら行われました。

第一次調査では原子炉が安全に停止したことを確認したものの、むしろ一般構造物の損壊、道路の陥没、1mにも及ぶ地盤沈下の無惨な状況を目にして、通常設計と原子炉安全設計の大きな違いに今更ながら驚いたことを覚えています。しかし今回の調査ではこれら地震の爪痕は既に修復され、通常の発電所の姿に戻っていることに安堵感を覚えました。再起動に当っては地震の究明と機器の詳細な健全性や機能確認を行うことは当然のプロセスですが、7号機はここまで1年半を費やしたことになります。

この間、海域を含めた断層や地質調査等で得られた知見を反映し、新耐震設計指針に基づく新たな設計基準地震動が策定されましたが、東電では更に大きな余裕を持たせた1000ガル相当の地震動（原子炉建屋基礎版上）にも耐えられる耐震補強工事が行われました。現地では機器・配管への200本以上のメカニカルスナバーや多数のケーブルトレーへのサポート追設等が実施されており、建設さながらの工事で大変だったことが窺い知れました。このように柏崎刈羽発電所は懸命な努力を続け、多くの試練を乗り越えて更に災害に強い発電所になったことは我々の眼で見ても疑いのない事実であり、早い運転再開が期待されます。

調査報告書については、我々の調査直後に行われた IAEA 第二次調査団の発表より早く公表することができました。この過程では、一部タービン機器の耐震安全性や重要度の考え方をめぐって、機械部会と技術者本音ベースの議論が行われたことを申し添えます。他部会もこのような経験は初めての様で、打上げ懇親会では大いに相互の親睦が深められました。

考えて見ますと、従来の原子力の様々な問題においては、国と自治体、事業者、学会の構図が一般的で、社会インフラの技術基盤を支える我々技術者の意見発信が弱かったように思います。今回の調査、結果公表は原子力・放射線部会としても技術者の良識を社会に発信する第一歩になったのではないかと考えています。



7号機原子炉納容器入口にて(右から伊藤、佐川、一人おいて成川の各幹事、中央は高橋会長)



## 「技術士制度活用 WG」の発足と活動について

WG 主査 佐川 渉

部会発足以来、原子力・放射線分野における技術士制度の活用について役員会で検討を進め、意見や提案を纏めてきましたが、この度、新たに部会内に「技術士制度活用 WG」を発足し、活動を進めていくことになりました。昨年9月の部会例会で班目先生に講演いただいた後、技術士会としての意見を纏め発信する機能を強化する必要が生じたためです。

班目先生他を中心とした東大原子力法制研究会では2007年3月より、原子力の法制度に関する諸問題を

整理し、「社会と法制度」、「技術と法の構造」の2つの分科会で、将来のあり方について産官学で検討を進めており、昨年末に「工事計画認可・使用前検査WG」が設置されました。このWGでは、米国のPE審査制度等を参考に、日本における第三者認証制度を検討することになり、技術士会からの委員参加を要請されました。昨年12月に準備会、1月に第1回WGが開催され、米国のPE審査制度を参考に、国内で技術士が設計審査を行う場合の検討課題を整理し説明をしました。

部会の「技術士制度活用WG」では、これらの検討課題について意見を交換し、技術士会としての意見・提案を纏めていく予定です。

また、法規制の変更にはまだ何年か掛かるとは思います。民間で自主的に技術士による審査を実施する制度を定め、順次実践して実績を示していくことが望ましく、この具体化についても部会「技術士制度活用WG」で並行して検討を進めることとしました。

部会WGメンバーとしては、部会幹事有志11名の他、新たにプラントメーカー3社から参加をお願いし、当面14名でスタートしました。WG主査は佐川が担当し、将来法制への提案で桶谷委員(三菱重工)、現行法制での活用検討で辻委員(日立GE)、中野委員(東芝)にWG幹事を務めていただきます。

なお、ロードマップ見直し、アクションプラン作成、班目先生提案対応についても本WGで検討していく予定です。



## 「科学技術と社会安全の関係を考える市民講座」に参加して

部会員 嶋田 昭一郎  
(嶋田昭一郎事務所)

原子力の仕事一筋にやってきましたが、一つの分野の専門家というところで、原子力全般に関して



はまるきり知識がない。暇になったのを機会に、原子力に関する知識を広げるために、いろいろな講演会、報告会などに出るようになった。上記の市民講座に出席したのもそのような理由からである。ここ数年原子力学会誌の編集のお手伝いをしている関係上、いい記事を探すのも目的のひとつである。

本講座には3年ほど前から出席している。これまでは面白そうな講演を選んで暇なときに出席したが、今回はたまたま第1回「科学技術と規制を考える」、第2回「科学技術と報道を考える」、第3回「科学技術と組織信頼を考える」、第4回「科学技術と地域経済を考える」、第5回「科学技術と廃棄処分を考える」と全5回に出席した。各回ごとに重要なテーマが選ばれていたが、私には特に第3回の組織信頼を得る難しさに興味を覚えた。最終回が新年であったので、講師の一人である日本WIN会長の小川順子さんが日本民族衣装である和服姿で現れ、心が和む気がして、好感が持たれた。今回の市民講座は原子力安全基盤機構との共同開催ではなく、東京大学の単独の開催であったので、多少講師集めに苦慮されていることがうかがえた。今回のテーマは多くの原子力関係者が頭を悩ませている難しいテーマである。技術士会原子力・放射線部門としても真剣に取り上げるべき問題である。技術士になったことでもあり、知識を広げて多少でもお役に立ちたい。この市民講座が、新しい良い企画を立案していくことはなかなか難しいと思うが、来年以降も継続していただきたい。

## 原子力 eye 特別企画 技術士試験 対策講座をまとめて

企画幹事 中野 智仁

本記事は、原子力・放射線・エネルギーという広範な出題範囲に対して、受験生に技術士と



して求められている能力を指南するとともに、技術士制度の啓蒙を行うことで、資格取得者を支援しています。年末年始の恒例企画となっていますので、既技術士の皆さんも受験時には活用いただいたのではないのでしょうか。私自身も技術士受験の助けとして記事を活用させていただきました。今年度は、今まで読者であった私がこの大役を任され、二次試験対策講座2回、一次試験対策講座3回を取りまとめました。既に1～4月号に記事が掲載されていますので、平成21年度の受験生に活用いただいているものと嬉しく思っております。

記事を執筆してみると、紙幅の制限から、実際の試験では1800字で解答する問題を300字程度で的確に解説することを迫られます。執筆者の皆様からは、我々執筆者が試験されているような気がするという声も出るほど、困難な課題でしたが、そこは技術士の皆さん、この課題をCPDの一環として専門知識・課題解決能力をいかんなく発揮して頂きました。しかしながら、試験問題の長文化は吸収することが出来ず、編集長のご好意に甘え、第二次試験必須問題の解説記事では1ページの紙幅を追加で頂きました。その際、「来年度は記事掲載を1回増やして、6回にしたいのですが・・・」とお願いしてみると、「来年度相談しましょう。」とありがたい言葉をいただきました。技術士の皆様、技術士を目指しているあなた、技術士（原子力・放射線）啓蒙をサポートいただいている出版社のご好意に応え、技術士制度を活用するための一助として個人で、会社で、原子力 eye の購入を推進しようではないですか。

解説記事の取りまとめは、想像以上に困難な課題ではありますが、毎回査読を頂いている原子力学会教育委員会の工藤先生の励ましの言葉を糧に、技術士制度の活用・技術士としての社会貢献につながると信じ、残りの取りまとめも頑張っていこうと思っています。

「若いうちの苦労は買ってでもせよ。」と言いますが、今年度、技術士試験を突破した若い技術士のあなた、一緒に苦労してみませんか。

## 茨城県地区の原子力・放射線技術士による新年会（2009）

◆ 広報幹事 齋藤 誠

2009年1月11日（日）、茨城県東海村の JAEA テクノ交流館リコッティにて、昨年



に続き 2 回目の茨城地区原子力・放射線部門の技術士による新年会が開催されました。日本技術士会の竹下参与

をはじめ、共催である日立技術士会会員、JAEA 技術士会会員など、総勢 27 名の方に参加していただきました。日本技術士会理事であり日立技術士会副会長の永田氏から、「国のためという視点で活躍してもらいたい。これからが表に出るチャンスである。」という力強い挨拶をいただいたあと、JAEA 技術士会会長の関氏の乾杯により、会が始まりました。

ビールや軽食をつまみながら、日本技術士会参与である竹下氏より、技術士に望むことなどについて挨拶をいただきました。続いて、栗原幹事から原子力・放射線部会の活動について説明があり、さらに、佐川幹事から原子力分野における技術士制度活用の取り組みについて紹介をしていただきました。

5 分の休憩を挟み、伊藤部会員による新春らしい尺八の演奏に耳を傾けつつ、杯を重ねたころには、お開きの時間までわずかとなり、最後に、各参加者から自己紹介、技術士としての活動、部会に望むことなどについての意見をいただきました。お酒の力もあってか話に熱がこもり、一人 1 分では収まらず、最後の方は駆け足となってしまふ一幕もありました。新年会らしく、私たちの目標を考える良い機会となり、また、普段、会うことがない人たちが顔を合わせることであった楽しい企画でした。報告の詳細は、ホームページの活動報告（講演会・見学会等）に掲載されていますので、ご参照願います。



## ● H21 年度下期の活動実績



### 1. 役員会・総会等

- ・2008年11月28日（金） 平成20年度第6回役員会（午後）
- ・2009年1月16日（金） 平成20年度第7回役員会（午後）
- ・2009年3月6日（金） 平成20年度第8回役員会（午後）

### 2. 制度活用具体化に関するもの

#### 1) 「柏崎刈羽原子力発電所の復旧状況調査」について

平成20年11月26日、柏崎刈羽原子力発電所復旧状況調査チーム（原子力・放射線部会、機械部会、電気電子部会、建設部会）が、柏崎刈羽原子力発電所 第二次復旧状況調査を実施。

### 3. 必要な技術士数の確保及び広報活動

- 1) 原子力 eye 「座談会 私はこうして技術士（原子力・放射線部門）試験を突破した」 2008年10月号に掲載
- 2) 原子力 eye 「原子力と技術士—その制度利用の可能性」 2008年12月号に掲載
- 3) 原子力 eye 平成21年度技術士試験「原子力・放射線部門」対策講座(1)～(4) 2009年1～4月号に掲載
- 4) 月刊技術士「東京電力（株）柏崎刈羽原子力発

電所の復旧状況第二次調査結果報告」2009年2月号に掲載

- 5) 原子力 eye 「日本技術士会による柏崎刈羽原子力発電所の復旧状況調査報告」2009年3月号に掲載
- 6) 原子力学会 HP の原子力・放射線部門技術士ページの運営(技術士受験情報や過去問題の解説)
- 7) 部会報「第4号」発行(2008.9.19)
- 8) 日本技術士会原子力・放射線部会のホームページ(部会組織ページ)には、各企業別に第二次試験合格者数と技術士会員数の内訳を掲載

技術士(原子力・放射線部門)会員内訳(2008年12月1日現在)

順位	勤務先	第二次試験合格者数	技術士会員数
1	日本原子力研究開発機構	52	25
2	(株)日立製作所・日立GEニュークリア・エナジー(株)	36	22
3	(株)東芝	17	11
4	三菱重工(株)	19	10
5	東京電力(株)	15	6
6	日本原子力発電(株)	5	3
6	電源開発(株)	4	3
6	原子燃料工業(株)	4	3
6	(株)関西電力	3	3
10	関西電力(株)	4	2
10	(株)東京エネシス	4	2
10	(株)BWR運転訓練センター	4	2
10	茨城日立情報サービス(株)	3	2
10	富士電機システムズ(株)	2	2
10	(株)日立エンジニアリング・アンド・サービス	2	2
10	リサイクル燃料貯蔵(株)	2	2
12	その他	22	41
	合計	248	141

注1:第二次試験合格者数は、官報の合格者名簿をもとに原子力・放射線部会で調査した結果です。  
 注2:順位は会員数でつけています。人数が異なる場合はこちら(http://www.nipponet.or.jp/dep/macro/d2000.html)にお知らせください。正確な技術士数とするため各社よりデータを提供いただけますと幸いです。  
 注3:会員数が0~1名の勤務先は、「その他」としてあります。

#### 4. 継続技術研鑽

##### 1) 講演会・例会

- ・2008年9月19日(金) (第9回技術士の夕べ)

講演「原子力法制度と技術士の役割」

班目 春樹氏(東京大学大学院教授)



- ・2008年11月28日(金)

講演「NUCEFの概要と研究成果」

内山 軍蔵氏, 前田 敏克氏, 松村 達郎氏, 赤堀 光雄氏(日本原子力研究開発機構)

- ・2009年1月16日(金) (第10回技術士の夕べ)

講演「BWRプラント化学管理の現状と今後の展望」

長沢 克己氏(東芝プラントシステム)

講演「柏崎刈羽原子力発電所復旧状況第二次調査」

成川 薫氏(東京エネシス)

- ・2009年3月6日(金) (第11回技術士の夕べ)

講演「原子力設備の補修技術開発と実機への適用方法について」

亀山 雅司氏(関西電力)

講演「高レベル廃液に含まれる長寿命核種の分離変換技術について—核種分離研究の現状—」

松村 達郎氏(日本原子力研究開発機構)

##### 2) 見学会の実施

- ・2008年10月17日(金) (共催)

日本原燃(株)ウラン濃縮、使用済核燃料再処理関連施設



現地で説明を聞く参加者

- ・2008年11月28日(金) (主催)

日本原子力研究開発機構NUCEF



## 会員の声



今本 信雄

(日本原子力研究開発機構 核燃料サイクル工学研究所)



原子力は茨城県の地場産業と感じる。茨城県在住で平成 19 年度の技術士合格者数は 99 名、うち約半数の 43 名が原子力・放射線部門からという統計がそれを示している。この会報を読まれている方の多くも茨城県在住の方と思う。

技術士登録が終わり、茨城県技術士会に入会した。茨城県技術士会には、毎月「The 技術士」という CPD 行事がある。順番で講師となり、工法や技術史などの紹介がある。部門を越え興味深い議論に参加させていただいている。この CPD 行事に参加して思うのは、部門は違えども技術に対する思いは同じであること、また似たような悩みにぶつかっていることである。例えば、「原子力施設では欠かせない除染作業では何重もの防護服をグリーンハウスで脱装する」という話をしたところ、「あれって、無限地獄みたいですね」と建設部門の方に言われた。アスベスト除去作業はそっくりの作業らしい。納期やコストに追われながらも、長持ちで、高い品質を追求していく姿に接することができるのは、この行事参加の一番の成果であり、励みにもなる。普段は考えないことを質問されることもある。「月面での放射線量はどのくらいか？ どれくらいの地下であれば遮へいできるか」頭をふる回転させ「うう～～ん、オーダー計算、どんぶり勘定で……かな？」

原子力・放射線部門の方以外の技術士とも接する機会がもてる地域の技術士会への入会を勧める。



林 克巳

(日立 GE ニュークリア・エナジー(株))



原子力・放射線部門の技術士となって3年が経つ。名刺にこそ載せているもの

の、この間、「一体この資格は何なのか」と自問自答を繰り返してきたが、未だに答えは出ず、自分なりに次のように解釈しています。この資格は、「時代と共に使用法やそれに伴う価値が変化する大変楽しみな資格」を外部的側面として持ち、「自己の技術的価値をハイレベルでキープし続けなければならない束縛効果」を内部的側面として持つものである。現在は、まだ業務の上でこの資格を使用することはないので、楽しみが無いように思えるが、その有効性は社内外からの「質問および相談の量と質で自己評価」することとしている。また、質問等に回答する場合においても「技術士としての回答」をするように心掛けている。このように、現在は大変地味な存在となっていますが、本来は、社会的認知度と影響力の大きな存在であるべき資格と考え、研鑽に励んでいます。情報公開が進んだとはいえ、一般から見れば、まだまだ原子力・放射線の世界はブラックボックス……、原子力発電計画が世界的に推進される中、原子力・放射線部門の技術士の役割はこれから大いに出てくるでしょう。また、私の会社では、技術士増加の取り組みとして、受験費用の補助と合格祝い金の支給が実施されてきましたが、新たな取り組みとして、技術士の意識高揚に、顔写真付きの部署別技術士掲示板(縦 800mm、横 1,200mm)を来客スペースに掲示しています。全国の技術士の皆さん、是非、この資格および技術士会をいろいろな場所でアピールし、原子力・放射線業界の安全・安心の向上につなげて行きましょう。





田中 健一  
(日本原子力発電株)



CPD 行事等予定表は、私にとって「どこでもドア」のようなものだ。これまで興味があっても接するチャンスがなかった技術分野がその先に広がっている。テレビや雑誌、新聞で見聞きし、なんとなく関心のあった事柄について、その分野の第一人者の講演を聞くことができる。先端技術の講演会など、探せば結構開催されているものだが、なんとなく敷居が高くて出かけては行けなかった。CPD 行事は、その敷居を低くしてくれた。

1 年前に、技術士登録をして技術士会に入会した。合格者歓迎会で CPD 講演会のことを知った。原子力・放射線部会ではほぼ 2 ヶ月に 1 回の割合で講演会が開催されている。これには必ず出席することにした。CPD 中央講座が月に 1 回、技術士会によって開催される。これも必ず行くことにした。技術士会の HP を見ると、これ以外の講演会のことわかる。私にはこれが一番の楽しいものになった。

航空・宇宙を手始めに、環境や農業など、あちらこちらへ出かけていった。講演は、期待以上のものもあったし、それほどでもないものもあった。それでも、好奇心を十分満足させてくれるものだ。講演そのものに加え、部会の雰囲気も皆違うのも興味深かった。これを続けていくと、CPD 認定会員登録できるし、APEC や EMF の登録もできる。なんだかとても得をしているような気分になってくる。

このような私の様子を見て、妻は「無意味な好奇心」という。そう言われれば、そのとおりだが、これこそが芸（技術）の肥しであると思っている。



### 編集後記

日増しに暖かになりましたが、部会

員の皆様におかれましては、いかがお過ごしですか。天も地も躍動の春です。ご健康とご活躍を切に祈り申し上げます。

第 5 号でも、著名なお二人の先生から巻頭言を戴きました。厚くお礼申し上げます。原子力・放射線部会の設立からほぼ 4 年間の間がたち、まさにこれからが正念場といえる時期となってきました。新しく「技術士制度活用 WG」の検討が、1 月から始まっています。今後とも、暖かいご指導ご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

最近原子力・保安院は 3 つの作業部会を新設しています。原子炉熱出力向上ワーキンググループでは、アップレートを行う際の原子炉の安全性、設備健全性、運転・保守管理への影響などを検討。安全評価ワーキンググループ「長期サイクル炉心評価」では、新検査制度で運転期間を変更する場合を念頭に、適切な期間設定を評価する際の考え方を整理、燃料ワーキンググループ「燃料トピカルレポート」は、原子炉設置・変更許可申請の引用文献を共通化するトピカルレポートに関し、燃料の評価報告書を作成、商業原子炉の長期サイクル運転実施、新設原子炉の安全審査作業の効率化に向けて必要な許認可ルールの構築を進めています。

学界においても、原子炉等規制法と電気事業法の重複規制等の問題を検討する「原子力法制の在り方検討委員会」からの分科会検討状況の報告があり、基本設計と詳細設計の 2 段階で設計の審査をするより設置許可審査に一本化の方向性が示されています。

部会では、原子力法制度改革の中で、この機会に「技術士は民間認証を担うもの」と位置づけてもらうためにも、「技術士制度活用 WG」を作って、日本技術士会の立場でも時期を逃さないようこの議論と提案纏めを実施するための検討活動を始めたところです。先ずは日頃の技術研鑽を積み、正しい知識を身に付けながら、中立的な立場の技術者集団として、社会のお役に立てる日が来ることを信じております。(高橋記)